

新井白石と近世後期の学者文人

——白石と伊勢貞丈・太田南畝・瀧沢馬琴——

宮崎 道生

一 近世後期における白石評価

科挙者としての新井白石の評価が定まるのが、天明から寛政にかけての時期のことである事情については、旧著においてほぼ明かにしたことであるが、その後、近世後期の学者や文人の著作をほのぼの歩鑑してゐる間に、それらには予想以上に白石の学識の影響がよいことを認めるに至つたので、本稿においては二三の事例を提示して、その証明しようと思ふ。

本論に入るに先立って、ここに紹介しておきたいのは「学者角力勝負 附 評判」の存在である。これは著者、年時ともに不明のものであるが、新村出博士が推定されたやうに（『藏書』）、天明八年

頃のものと思はれる。それは、後に掲げる通り、「元禄年中より天明八年迄」云々と記してゐるからである。標題の示す通り、これは学者を力士に仕立てて勝負をきめようとしたもの、先づ中井上方に

蒙御免
元禄年中より天明八年迄日本
書院にて角力興行仕候
とかかひ、その下に

行 桃花老人 聲水世目原篤信勲進元管家
司 桃花老人 羅山 後毛利與齋善添大江家

とあって、勲進元は管家（この場合は菅原道眞個人ではなく、菅原家を指すか）、善添は大江家、行司には桃花老人のほかは朱舜水、林羅山の二人が当られ、世話役は貝原益軒、大宰春台、毛利璠珀の三人といふことになつてゐる。しかして、全

○學者角力勝負附評判

〔徳川文藝類聚評判記 卷十二〕
〔国書刊行会本、三一四、五頁〕

東大關 番山熊澤二六八

前頭 藤樹中江與右衛門

關 脇 徂徠狄生惣右衛門

前頭 惺窩藤原欽夫

前頭 東涯伊藤元藏

小 結 廣澤紐井次郎太夫

前頭 一本堂杏川く仲

前頭 觀海松崎才藏

前頭 玉山秋山儀右衛門

前頭 鳩巢室新助

蒙御免

元禄年中より天明八年迄日本
博士書齋院にて角力興行仕候

西大關 白石新井筑後

前頭 錦里木下順庵

前頭 南寺南村梅軒

關 脇 仁齋伊藤源佐

前頭 明霞宇野三平

前頭 東洞吉益周助

小 結 南郭服部小右衛門

前頭 兼山片山冬藏

前頭 周南山縣少助

前頭 崑陽青木文藏

前熊耳大内忠太夫 同山鹿高祐 同安藤仁右衛門 同竹中通庵

同閭南山崎嘉右衛門 同三河平太夫 同蓮池親実 同野三竹

同太唐末松弘 同稻若水 同河上靜齋 同北山楊益

同名古屋玄醫 同興原好古 同淺見綱齋 同岡島冠山

同子寧顯殿左膳 同多田兵衛 同島石葛辰 同寺島良安

同香月牛山 同十田菊宮 同神田白龍子 同西川求林齋

同白駒岡多仲 同股部元卿 同谷口氏四郎 同井沢長秀

同木村高教 同佐々木玄龍 同物部道齋

行 桃花老人 羅山 世 勸進元管家 太宰德夫 差 添大江家 司 毛利貞齋

同瀧水守佐見惠助 同金平野源右衛門 同筑波山人 同寒川道祐

同中村惕齋 同藤井瀧齋 同守津宮由迪 同中根玄桂

同中西曾七郎 同井上東溪 同谷素有 同日向英俊

同今大路道三 同柳原玄鄰 同佐藤剛齋 同翠竹庵

同仲英服部多門 同新井白城 同深川親和 同岡本一抱子

同北山寺庵 同望月三英 同川村瑞軒 同北村季吟

同平賀源内 同伊藤才藏 同松平見林 同壺井義智

同和留子等 同玉木肇齋 同大宰弥三郎

俣として九十八人の字者が動員され、次の図のごとく、大岡以下へ横綱は見えない。南脇、小結、前頭の順に、それぞれ東西にわかれてゐるのである。

一見して明かなやうに、これにおいては東の大岡が熊沢番山、西の大岡が新井白石となつてをり、番山、白石の兩人が元禄八年以後の百年間において最も傑出した字者として位置づけられてゐることが知られるのである。ところで、この両雄の勝負であるが、それについては、左のごとく「勝負は追而」とあり、決せられてゐない。

わる口「サア評判が聞かひ、大岡の仕打はとうだ、行司「そのやうに急に申ても分らぬ事、しばらく御まち被成ませ、元来この熊沢には、字風もみな様とはちがひ、志の立やふが大きい、六経は心の註脚と申が御字風、それゆへ他の御方とちがひ、故事を知つたの、詩文がよいのと申を自負するやうな、少事には心をとめられませぬ、平生の言葉に、今日の実事におこなはぬ事は、字にあらずとの事、それはともあれ、

去ル諸侯に初見のせつ、漢の酈食其高陽の一酒徒と申た趣向あり、其外品川の駅とやら、一崎の駅とやらにて、防火の御手当まで、口計の僞者の及はぬ事、また何所のか寺を破滅いたされたと申が、あまりに果斷なやふに論ずれど、心有りての事、何と大岡に居きました記が分りましたか、次に白石先生を論じませふが、是は多様な御存知の御方、幼年より一ト通りの御方ではござらぬ、聖賢考も重宝いたします、此方の心のままたいたしたから、サアおもしろき事が御ざりませふ、勝負は追而

この兩人以外の場合、かりに上二段の人凡について見れば、組束——仁齋の組合せでは仁齋の勝、広沢——南郭、及び玉山——周南の場合は共にあがり、藤樹——錦里では錦里の勝、惺窩——南等では惺窩、京涯——明霞では東涯、一本堂——東洞では東洞、鳩巢——昆陽では昆陽がそれぞれ勝、靉海——兼山の場合は追而となつてゐるので、そもそもこの番附の編成の仕方といひ、勝負のきゑ方といひ、多分に問題はあゝと思ふが、少く

ともかういふ評価が、天明当時の学界の情勢や一部の学者の判断を反映するものである。ただ、否定できないであらう。

右の評判の内容について一言すると、白石の部分で「是はみな様御存^の御方」とあることが、先づ注意せられる。即ち、この項には白石が学者としてすでに定評ある存在となつてゐたことが、これから察せられるのである。その理由として挙げられたところは、「幼年より一ト通りの御方ではござらぬ、軍器考も重宝いたします」とあるだけで頗る物足りないが、ともかく学界では白石は第一級の人物と見なされるに至つてゐたことを示すものと、私は思ふのである。「幼年より一ト通りの御方ではござらぬ」とあるのは、折だ。柴の記などを通じての認識でもあらうか。軍器考、即ち本朝軍器考は白石歿後、元文二年、同五年に刊行を見てをり、この後寛政元年にもまた上梓されるが、本書は白石の正史学者・文献学者としての実力を認めしめるに大いに役立ったもので（後掲、伊勢貞丈の語、参看）、この評判において特

に挙げられたのも当然のことと思はれる。因みに、軍器考のほか、天明年間までに刊行された白石の著作は、傳雲集（享保一二・安永七年）、白石先生餘稿（享保二〇年）、同文通考（宝暦一〇年）、校正新安手簡、等である。なほ、右の文中に、「故爭を知つたの、詩文がよいのと申を自負するやうな」云々があるのは、暗に白石を指しているたものと推測される。また、終りの部分、「此方の心のまゝにしら、サッおもしろを爭が御ざりませふ」といふのは、白石が短期間にして幕閣を去り、十分にその手腕を振ひえなかつたことを惜む気持ちのあらはれと見られ、当時の白石評価の一例として注意をひくものである。

二 白石と貞丈

周知の通り、伊勢貞丈は室町時代以来名家として知られた伊勢氏の出身で、享保十一年以後、小姓番士として徳川幕府に仕へた人である。伊勢氏は代々武家の故実に詳しかつたことと、春日局の縁とにより、貞丈四代の祖一貞衡の時、幕府に登用

され千石を給せられることとなった。爾来、貞守、貞長（後貞永）、貞益と代を重ねたが、父貞益の死後まもなく兄の貞陳も夭折したため、幕府は一旦領地を召上げたが、古来の名家の断絶を許し、旧領地の一部―三百石の地を与へ、寄合の列に加へしめた。かくて貞丈は生活の安定を保証され、同時に閑暇にも恵まれることとなった（小姓番士は肉帛であつた）わけである。

かやうに故実の家伊勢氏の生れであつたといふ境遇が、何よりも貞丈を白石と結びつけるきっかけとなつたと思はれるので、既に公刊を見てゐた本朝軍器考が、真先に貞丈によって誦まれることになつたものと推考される。貞丈の在世中において、白石の著書は既述の通り軍器考のほか幾種が上梓されてゐたから、おそらく貞丈はそれらのいづれをも見たことと思はれるが、その他に、新井家の蔵書を直接借覽する機会をも持ちえたやうで、当時としては白石の学識にふれることの多かつた一人ではないかと考へられるのである。新井家

との關係といふのは、白石の孫邦孝、邦賢と交りがあつたことで、それは安斎隨筆中、軍器考を叙した部分において

「是も白石翁の撰なり、此の書は愚得隨筆を本基にして自見を加へて滴簡也。書きたるものなり、……彼の愚得隨筆は白石翁の妻の父朝倉孫右衛門曰下部景衡と云ふ者……古書并に近代の事を披書して十冊とし愚得隨筆と号す、予白石の孫新井源太郎邦孝と知音にて、彼の隨筆を借り字して熟覽するに、是より軍器考は出で、
、レ（新訂増補東叢書本）
第一四〇頁」

とあること、及び同じく安斎隨筆のうち、新井名の説明文中で、邦賢につき、「兄源太郎邦孝の養子となる、父の名は伝次郎明卿、君美より四代伝次郎邦賢の説なり、邦賢実は君美の孫なり」といつてゐることから推量される。

貞丈が白石について相当深い関心及び認識をもち、大いに意を払つてゐたらしいことは、これから向題とする白石著書の閱讀状況を見てもうなづかれることであるが、本朝軍器考標題の序文に

見える白石評が端的にそれを示す。

「本朝軍器考出でて、本朝軍器の説備はれり。

故に謂へらく、軍器故実の徒、皆其の驥尾に附

せざるは莫き也と。予も亦常に軍器考を愛翫す

。然るに尙ま疑を抱き通じ難き有る也。夫れ白

石先生は天下の英雄、古今の俊傑、其の千言万

語、豈に一誤有らんや。焉んぞ疑ふ可きもの之

れ有らんや。然るに、予疑を抱き通じ難きは何

ぞや、信無し已が愚蒙に因りて也。云々、

（源丈は、石村貞吉代著の勢等）

それならば一体、貞丈はどれだけ白石の著書を

評したのであらうか。貞丈の時代には、白石の著

書を見ることにはかなり制約があつたので、邦考

・邦賢と親しかつたとはいつても、その藏書を自

由に借りることができたわけではないから（白石

の在世中から著書は原則として秘匿された）、お

のづから限界があつたが、白石の著作中、貞丈の

安斎隨筆及び安斎雜考にその名の見えるものを挙

げて見ると、次の通りである。

1 探覽異言

2 東雅

3 同文通考

4 古史通

5 軍器考

6 新案手簡

7 南島志或は琉球回事情

8 新野向答

これらの著述の引用状況を、それぞれにのき一二例

示することによつて與檢すると、最も多く引照さ

れた1の探覽異言の見えるものとしては、

○雨衣 雨衣は上古は貴賤ともに褌を着たり、

近世に至りてカツパと云ふ物を着す、……

カツパもヲランタ人の衣服より出でたり、采

覽異言喁爾陀の篇に云く、又披衣纒如祀為莊

服德浮屠著僧伽絮（笠云「フット」上衣云「マント

ル波爾瓦爾呼為カツパ此向雨衣蓋倣其制也」

と云云……（『探覽異言』二九頁）

があり（その他、○常世国・○南瓜・○インテン

の華・○ボタン・○消毒の葉のウニコウル・○ミ

イラ・○馬・○サントメ島・○たばこ、などがあ

る）、2の東雅を引いたものには、

○和語 凡万物の名并に言語、其の意儀悉く解

釈しがたし、和語には略語多し、其の本語を

知らざれば其略語の義理辨へがたし……近

世、貝原篤信が著しし日本叙名、新井君美が

著しし東雅等の書に和語を収せり、是れらも一言の収はなほ、理説を以て収める類は非なり（同上、第一、三頁）

が、その同文通考を引いた文としては

○和の字 假名の和の字、白石翁の同文通考に遍の字なりといへり、誤りなり、○貞丈庵に軸の字の草書なり……（同上、第八頁）

がある。へ同問題の説明がもう一箇所ある。次に4の古史通に対しては批判的にこれを取上げ、新井筑後守源君美が所著にて、我が國の古史に記す所の事蹟を辨論せる書なり、旧事本紀、伊勢五部書等を尙書と知らずして引き用ひたり、歎すべき事なり、古史通の詁法に曰く、伊特諾伊特冊、兄と妹とにて夫婦に成り給ふ、……總じて是等の類、父子兄弟の向に於て其の倫の正じき所を得給ひしとは見えず、云々と記した後に、

貞丈庵に、右に謂へる処の神の所行は、異國の聖人の立つる所の五倫の道に違へり、……名教に於て何の教とし鑑戒に於て何の戒とする所

かあるべきと云ひて、強ひて五倫の道に合す故に説を作りて収きなすは還りてよろしからず、其の儘にさし置きて手を付けざるは直にて善し、……（同上、第七頁）

といひ、また別の箇所において

此の書は白石翁（新井筑後守源君美）の撰にて、世の事を信用する書なり、然れども旧事紀、伊勢外宮の五部書等を引用せり、彼の書は偽書なり、証とするに足らざるものなり、故に予は古史通を知らず、白石翁、漢學に於ては豪傑なれども、本朝の事に於ては漢等の片手わざにしたる事故精しからず、軍器考も誤りあるは其の故なり、（同上、第二頁）

と述べてゐる。5の軍器考についても同様、

是も白石翁の撰なり、此の書は愚得隨筆を本基にして、自見を加へて潤飾して書きたるものなり、表には顯はさざれども武用辨略も少し摘みとれる所も見ゆ、彼の愚得隨筆は……（前掲）彼の隨筆を借り写して、熟覽するに、是より軍器考は出でたり、彼の隨筆の中に引書の名を書き違

いたり、……是又片手わざなる故精しからざる所あり、其の外の誤り所々に見えたり、可借、可借、（同上）

といひ、これを片手わざとすると共に、本書を以て日下部景衡の著書と得、隨筆を本にして作り上げたものと断じてゐる。6の新安寺簡のことは、陸奥、五十四郡につき述べた部分において、

新安寺簡（新井筑後守と水戸の儒臣安積寛其衛との手簡をあつめたるなり）に曰く、陸奥五十四郡の事、年頃心に懸り候得共、とかく知れ兼候……又曰く、……先師申候は、……

三ヶ條の御尋、御垂示に預り候はゞ可為大幸候（以上新井氏手簡なり）○貞丈云く、右に所謂先師は新井氏の師木下順庵なり、安積が返簡は見えず、（同上加四。）

といつてゐる。さらに、7の南島志もしくは琉球国事略は、琉球の舜天王の事を述べたところで、「琉球の先祖舜天は、鎮西八郎為朝の子なるよし、東涯白石など明かに記せられたり」といつてゐるのが、その披見を思はしめ、また8の新野

向答の披見は、嘉貞向答（大塚嘉樹と貞丈との向答）——水干の條の「水干或作水旱、此名義未詳、定基卿（註、野々）所答于新井君美問亦迂速臆說未足執之乎」（一、二頁）（一、二頁）とある一節、および鳥帽子の條に、

（前略）○貞丈云く、白石の問によりて高倉殿・山科殿・野々宮殿三家の答書有之うのし持て候、その答の中には取りがたき事も向々見え候、公家の人々の説なりとて悉くは信じがたき事に候、公家にしづられずして古書を廣く見るにしかず存候、以上（一、二頁）

と見えるのが、それを推測せしめる。

以上列挙したところは僅かな事例にとどまるが、貞丈が白石に敬意を表してゐたことは、白石をよぶに白石先生、白石翁の称呼を以てした一事からも知られるところで、特に海外知識においては虚心坦懷に白石説に従つた魏がある。また、古史通についての記述の中に見える通り、漢学の方では白石を豪傑と認めたやうであるが、本朝の事に於ては漢学の片手わざにしたる事故精しからず、

とあるやうに、日本の學においては必ずしも推服してはゐない。即ち、同じく古史通の説明の中で、旧事紀や伊勢外の五部書等を偽書と知らずに採用してゐる態度を指摘し、故に予は古史通をとりずと、述べる態度、の字に關する同文通考の訛批判、嘉興向答一水千の條における新野向答批判、さらにには前掲一水朝軍器考標疑、および同増註に見られる懷疑補正の論評等がそれを示す。つまり、わが國の古典等や有職故実の學、武學等においては批判的態度を以て白石に付したといへるであらう。へ但し、武家故実の學では白石を大先輩と認めたことは標疑の文の示す通りであり、また公家の有職等においても、野々宮定基・壺井義智と並べて名人として取扱つてゐる——の野々宮定基卿年等一齡三七一夏

平田篤胤の批評にもある通り（觀政舎）、貞丈は有職故実の學において当時全く他の追隨を許さなかつたばかりでなく、學者としても一見識もつてゐた人物で、いはゆる國學者たちから尊敬されるのも尤もと思はれる面があるが、いま当面の白

石との關係においても、両者の間には考へ方や立論の奥で共通するところが少なからず見出されることである。いま最も特徴的と思はれる奥の幾つかを挙げると、（一）儒教道徳を以て普遍的道徳となす奥、（二）内外の并列、自國尊重の態度、（三）學者的研究態度、等がある。白石において左の諸奥の認められることは今更いふまでもないところであり、私自身も既に詳述したことであるから、ここでは貞丈の場合だけを述べるとして、第一の奥は、例へば、「儒學は聖人の道にて考據定信を知りて躬に行ふべき爲なれば、誰とても是れを學ばずばあるべからず」云々といふ文章（諸學等一四五頁）にそれが認められる。この奥は後の國學者と全く異なる奥で、後述するやうに、いはゆる神道者たちの牽強附合の態度をのよく斥けてゐる。いふまでもなく近世の儒學界は、諸派が並び立つてゐたのであるから、近世中期を生きた貞丈としては、諸學派中のどれかに傾いてゐたと考へることもできるわけであるが、私には格別どれを支持したといふ形跡もないやうに思はれる。據ひて

いへば、やはり当時学界において優勢であつた古
学派に最も賛成するところがあつたのではあるま
いか。それは、近世の藝傑として、「儒家にては
荻生徂徠、公家故実にては壺井菴知、歌学家にて
は沙内契沖、神道家にては吉見幸和、医学家にて
は岡本一抱子、書家にては細井知慎等なり」とい
ひ、儒家として徂徠を推重してゐることのほか、
宋学に対しては鼓しい表現が用ひられてゐること
において、それが感ぜられることである。即ち、
敬の字の項において、「朱子の言には敬の字を大
切にする故……吾が心にて吾が身を常に縛りおく
が如く甚偏屈にて樂しからざる事なり」(第一三
頁)といひ、或は我が国の古伝が宋の理学によつ
て附会されたことを隨所で非難してゐること(。
掛鏡為神体。○吉田家神道。○理学神道。○土金
の伝等)、またとくに「排斥宋儒」といふやうな
項目を設けてゐること等がそれである。(○排斥
宋儒の項では、山鹿素行を徂徠に先駆する人物と
認めてゐる) 徂徠尊重に關連して私の気のつい
た一つは、學問しても聖人にはなれぬとするの論

で、この吳貞丈は徂徠と見解を一にする。貞丈が
「或儒者の説に、學問すれば賢人になる」賢人
になりて弥修行すれば聖人になると、是れ甚だ
心得違なり、……聖人の書に見えたる人倫の道
を身にとり行ふ人を賢人と云ふなり、聖人は胎
の胎内より聖人に生れつきて出づるゆゑ、
にはなりたくともならぬ事なり、……」(。
聖人賢人になると云ふ事(第一四頁)。
といつてゐるのは、徂徠の論

「夫れ聖人聰明睿智の徳は、これを天に受く、
豈に學んで至るべけんや、其の徳の神明不測な
る、豈に得て窺ふべけんや、故に古の學んで聖
人たるもの、唯々湯武孔子のみ」(神皇正統記)
或は

「仁は聖人の大徳なり、……智も亦聖人の大徳
なり、聖人の智、得て測るべからず、亦得て學
ぶべからず」(同上)
といふの論と全く同一である。

但し、徂徠に対しては一面きびしい批判をもち
けてゐる。例へば、徂徠及び内入らが徳川家康の

代をさして「国初」としたことを大いなる誤りとし、「日本にて国初と云ふは国常立尊をさして云ふべし、東照宮天子を弑し給はず、王位を奪ひ給はず、新に国号を建て給はず、然れは国初と云ふべき理なし」といひ、「荻生家の文章は古雅にして巧なるべけれども、日本に生れながら日本の事を能く辨へ知らざる故に、国初など云ふ事を云ひ出すなり」(「国初」第一頁)と云ふつけてあるほか、著名な意見書政談を以て無益の書とし(「政談」第二頁)、「おしなべて徂徠派の學者を、敬の字を廢する故に身持の放盪なるものが多い、と非難した」(「敬の字」第一、二頁)と云ふがそれである。因みに、右に「荻生家の文章は古雅にして」云々であるのは、古雅を文道の理想とする思想——「読の雅俗は文義にあづからぬ事なれども、俗説は賤しく庸劣、古雅なるこそ文道にはよけれ」(「經史古語俗読」第一、三頁)——併せ見るべき言葉であらう。

第二の——内外の弁別・自國尊重の態度は、いくつかの所論に見られるところで、それらは多

く當時の儒學者らの華大主義的傾向の糾弾と結びついて述べられてゐる。例へば、「中華中国中夏中朝」の項において、

「是らは國名に非ず、國を費ひ褒めて云ふ称なり、……然るに近世俗儒の輩、日本の事を夷狄と称し、漢土の事を中華中国などと称するは、大愚のみならず大不義なり、我が生國を賤めて外國を貴む事は義に非ず礼に非ず、聖人の道に非けり」(「孝」二頁)

といひ、(同様の見解のもとに、杉田玄白が解體新書の凡例において、シナを中華と称せず、漢と称したことを以て「吾なり」と評してゐる——「漢唐」三頁) 吳泰伯始相説を斥けては、

「按に、凡そ漢土の書に日本の事を載せたるに大に違ひたる事どもあり、……吳の泰伯を日本の始祖とする説は、彼の國賊(註、自國を賤し)等が心に適ふ故、幸にして其説を主張し、牽強附会し、潤飾を加へて著述するもの多し、」

(「日本帝祖爲吳泰伯」一頁、四) と激烈な口吻をもらしてゐるのが、それである。

このほか、同趣旨の論に「不義儒」といふのがあ
るが、他方、西川^{（神）}愚軒の日本水土考を推察して、
「此の西川が説、天地陰陽・自然の勢に随ひて水
土の異を明かにし、生民の性を詳かにせり、証る
にありず、他の腐儒、水土の考なく漫に倭俗と称
して賤しめ侮るものと同日の論に非らず」〔○日
本水土^{（才）}七頁、一〕と批評したものもある。

なほ、貞丈のかういふ考へ方の徹底性を示すも
のに、本朝軍器考増註の一節、本朝の二字を不要
とした論がある。即ち、いふ

「異國ト日本トノ事ヲ雙ベテ云フ時ニハ日本ノ
事ヲバ本朝ト云フベシ、……此ノ軍器考ハ日本
ノ軍器ノ事バカリヲ考ヘタルモノナル故、本朝
ノ二字ヲ加フルニ及バザル事也、然レバ此ノ題
号、本朝ノ二字ヲ加ヘタルハ誤ナランカ、」〔

双書本第二
三五五頁

周知の通り白石は、水戸の學者たちと同様、太伯
國祖説を斥けたが、荻生徂徠や、同門の室鳩巢と
は異なつて、自國尊重の念は強かつた方であるけ
れども、しかし白石には、自ら儒學者を以て任じ

てゐたことであるから、貞丈のやうに「俗儒」「
腐儒」といふ表現を用ひて、シテ崇拜の弊を非難
するごとき激越な態度は勿論見られない。

ところが、さきにも少しくふれたやうに、他方
では神道説・神道者に対して容赦なき態度をとつ
てゐる。既述の通り、貞丈は儒教を以て普遍的道
徳説と認めてゐるのであつて、当時の神道者が仏
教もしくは宋儒の理説を以てわが國神代乃至上古
の事蹟を意味あり氣に解釈することを毛牽強附會
の妄説としてとらなないのである。即ち、「神代事
蹟」の項においては、神代の事蹟にたしかなる事
はなく、ただ古人の語り伝へであつたのが、天神
天皇の時に文字が伝はつて来てより書き記された
が、語り伝へる傳へが同じでなかつたから、日
紀においては一書に曰くとして諸書の不同をぞの
ままに挙げたのに、後代の巫字の徒に至つては、
まるで昨日今日見聞したやうに詳かに説き、或は
陰陽五行相生相剋の理を以て、或は仏説の因果方
便神道神変の説を以て牽強附會の妄説をつくり、
また儒家の仁義礼智・孝悌忠信の道を述べ文へ、

修飾して妄説を巧むので、その所為はまことに悪むべきであるとし、

「神の事は、元来神代の書なく諸人の口々に語り伝へ聞き伝へののみなれば、半実半虚なるべし、……抑諸国の神の本社の神靈は奇妙不可測の靈驗顯す事あり、是れ神徳の悔るべからざる所なり、崇むべし、必ず深き神理にて然るなるべし、狭く小き人の智を以ては其の神理を摸る事叶はざるなり、其の神理は深し、人智は浅し、何ぞ及ぶべけんや、」云々

と述べてゐるのを始めとして、「神道」「上古之事」「按」「日本紀神代卷」等の項においても同様の見解を披瀝してゐる。しかして、「神道」論の一つ（同名のものが三項目ある）において、「凡人倫の道の事は、神道者が教ふるに及ばず、其の爲に儒道あり、片端の似せものよりは其の本道がよし」（第一、二頁）といつてゐるところに、前述の儒教道德尊位の態度が再確認されるのである。

白石は、神道・神社・神事等に対しては、晩年深い関心を示しつつも、それらをいはゆる祭祀祈

禊の方面として取扱つたし、中世的神道説にはきびしい批判を加へ、また「神事と故事とは格別」といひ、「俗世の神道」といふやうな表現を以て附会的神道を斥けてをり、他方、「神代の遺風」といつた場合、それは唐虞三代の礼制に該当するものの遺存を意味したのであるから、貞丈の考へ方は白石に近いと認めてよいであらう。但し、右に掲げた文中に見えるやうに、「諸国の神の本社の神靈は奇妙不可測の靈驗顯す事あり」云々といふ見解は、白石とは異なるところと思はれるもの、後の国學者への通路と認むべきものであらう。要するに、古典の伝へるところを史実として認めようとする態度においては両者は似るが、白石の場合は儒教的合理主義の立場から史実を理義的に解釈しようとするのに対して、貞丈は古伝の不合理性をそのままにさしおくことをよしとし、強ひて道理や意義を見出さうとはしてゐないやうに思はれる。

第三の正史學者的研究態度は、貞丈の場合、故実へ主として武家へに關するその膨大ですぐれた

業績がそれを実証することはもとよりとして、例へば次のごとき所説を通して、もそれが知られる。

「或人の云く、古史を尋ねて古の事を知りて何にかせん、今の世の事をこそしるべけれ、といへり、是も一理あり、今世の事も禁中營中の作法より、諸国の地理風俗土産等の事迄も知るはなき事なり、今を知り古を知るは古今通達の学者なり、古史の事知りて今の事を知らず、今の事の事知りて古史を知らざるは事において、同じる事ありて、事滞る事あるべし、」云々（「古史知不知」^{第五頁}）

これによつて、貞丈の故実究明が單なる好事ではなく、一箇の足見に基いてゐたこと明瞭である。貞丈は、白石のやうに時勢にたづさはることがなかつたから、人物および學問のスケールは大きいとはいへないが——白石の場合は右にいはゆる「古今通達」の學者といふことにならう——、考証の精密適確といふ点では、白石を凌ぐところがあるやうである。

この歴史学者的態度に關連して、兩者の論に共

通したものの一つ——秀吉論を附記しよう。

白石の論は、周知の通り読史餘論に見えるところで、秀吉に英雄の資質あることを認め、伯耆中の伯耆としてあるものの、その成功を以て「此時乱臣賊子天下に首を並べて、たゞ勇材詐謀ある人をのり尚ぶ事を知て、仁義忠孝などいふ事は、かつて知らざる時にあひ給ひしかば、時運に乘ずる事を得給ひし也」と解釈し、「所謂乱世の英雄にてありし也」ときめつけてゐるが、貞丈も亦、白石同様、秀吉に對しては酷評を下し、左のごとく述べてゐる。（但し、どちらかといへば、白石の批評の方がゆるやかであるとなしえやうか。）

「秀吉、朝鮮を攻めて後に大明を攻めとりんと欲したるは器量大なる人なり、と云ひて称美する人多し、貞丈云く、是れ器量大なるには非ず、器量小さくして慾深く大なる人なり、器量と云ふは才智なり、秀吉は無学文言なる人にて、悪才和智あり、善才正智なし、唯虎狼の如く武威を張りて人を怖畏せしめて國を治めんとす」云々（「秀吉器量」^{第一、四一頁}）

もつとも、江戸時代においては秀吉は概して儒學者からは非難されたのであり、まして白石も貞丈も幕臣であつたのであるから、かういふ態度がとられたとしても不思議はなからう。

以上、白石と貞丈との相似点を摘記したが、はじめにも述べた通り、海外知識の貞では貞丈は素直に白石に敬服してゐたと思附れることで、その海外知識の乏しかったことを示す事例には、オランダや天主教についての記述がある。前者は「固風」の裏に見えるところで、或人の説として、今後五十年も経過すれば日本の風俗が全くオランダ化するであらうこと、その理由は、オランダには聖人の道が渡らなかつたから徳義を尚ぶことを知らず、蓄財により富貴を致すものを貴がからである、と記し（第一、五三頁）、後者の「天主教」は、その名称をはじめ、テウスやバテレン・イルマン等につきごく簡単な説明を加へたものである（第二頁）これを白石の西洋紀聞や采覧異言、外国之事調書等に盛られた知識と比較する時には、餘りにも幼稚の感があり、さすが自信家の貞丈もカブ

トをめぐざるをえなかつたことと肯かれる。しかして、右三書のうち貞丈が見たのは采覧異言だけであること、いふまでもない（他の二書は秘匿されてゐた）。もつとも當時は、オランダの事は別として、キリシタンについては、荻生徂徠が「吉利支丹ノ書籍ヲ見ル人無キ故ニ、其教如何ナルト云ヲ知ル人無シ」（政談）といつたやうに、大部分の學者が目隠しされた状態にあつたのであるから、独り貞丈だけが賣めるわけにはいかないことである。

白石と貞丈との關係につき、最後に一言しておくべきは、さきにもふれた本朝軍器考述作についての貞丈の誤解——日下部景衡著『應得隨筆』——本にして本書が書かれたとする——である。これについては、既に石村貞吉氏の所説があり、その誤解である理由として、第一に白石の学风が新奇をたてるもので、他人の説に附和雷同するやうな性質のものでないこと、第二に軍器考編著に關して白石が相当力を用ひたことは白石手簡に徴して明らかであること、第三に白石は景衡を待つに常

に後進者を以てし逆に景衡は白石に対しあくまでも師礼をとつてゐることへ白石手簡、本朝軍器考、集古圖說序等を微証とすゝ等を挙げられたが「伊勢貞丈附録、本」補足的に二三の史料を提示するならば、白石自らの言葉として次のごときものがある。

(一) 新安手簡

一 兵庫録の事被^{七月十四日}仰下奉存候、先年本朝軍器考と申もの、二十卷計有之候を、賤息等が為に撰述致し置候き、
(一 白石全集五)

(二) 同右

一 兵庫録の御礼、先書に申上候如く返すべくも難申謝候、就夫前歳より集候て、賤息等に取らせ候本朝軍器考の事、被仰下候、何より安き御事に候、雖然も、これ本朝の事にて、其事俗向に行はれ候もの、い事と申、不孝なる輩に便りし候はんと俗語のみにて綴り候ものにて、中々高明を活すべき物にあらず候、……(同左頁二)

(三) 同右

一 軍器考御附札に候文字、誤候處々、皆々被^二仰下候通に候、めたと草を起し、もとはひらがな候を、さる學生衆をたのみうつし、もらひ、楷字に仕候へ共、……(同上頁三)

右はいづれも、彰考館總裁たる安積澹泊にむかつていつてゐるところで、信頼すべき言葉である以上、軍器考は白石の撰——そこに子息や内人たちの協力があるにしても——と見なくてはなるまい。なほまた、本朝軍器考集古圖說に附せられた白石の序中に、「我が陶する所のものも亦、多からずとせず、伝摹の図を得る毎に寫すは」云々(源漢)と見えることから類推されるやうに、白石自身の年末の研究が土台となつて本書は出来上つたものと考えられるのであり、断片的なものに過ぎないが、現存の古器圖說(新井清)、考古圖卷(藤田敷)等がそれを思はしめる。だから、面書の酷似は、石村氏のいはれたやうに、貞丈の解衆とは逆に、軍器考が本で愚得隨筆はそれから出たものと解することもできるが、それよりも、著作の先後は別として、白石が景衡の持つてゐた知識

を本書に取り入れたことから、さういふ酷似が生れたと解する方が妥当ではあるまいか。

以上で白石と貞丈との關係についての考察を終るが、国史学者・古典研究家として親た場合、貞丈は、白石と国学者とくに平田篤胤などとの中間に位置し、或意味では通路となつてゐると認め得るやうに思ふ。

三 白石と南畝

大田南畝は狂歌師蜀山人として在世時より一般に人気のある人、貞丈と同じく幕府の禄を食んだといふものの、その身分は始め御徒にすぎず、のち四十八才の時、支配勘定に昇進したものの、百俵五人扶持といふ輕禄にとどまつた。和漢の學に通じ、人徳もあつた人物としてはその地位は不釣合の感があるが、家格身分の固定した當時にあつては止むをえないことであつた。しかして、さういふ環境下にあつて、寛政の學問吟味に應試し支配勘定に昇進しえたことは、異数の事例であり、さうして南畝その人の努力の賜物であつたのであ

る。これが南畝の活動の天地を広くし、かつ知見を増し磨くきっかけをつくることにもなつたわけだ、南畝の白石認識が深くなりえたのも、この支配勘定への昇進が有力な原因であつたと判断されることである。

一俤、南畝が何時白石の存在に注目し始めたかについては、今のところ明証とすべきものはない。南畝の白石認識の通路としては、管見では、師の松崎觀海と師に準すべき宮瀬龍門、香山上人、および友人の岡田寒泉がある。⁽⁹⁾南畝が觀海の門に入つたのは、明和三年、十八才の時の事であるが、觀海が白石について一見識もつてゐたことは、湯淺常山の文会雜記によつて明瞭である。いふまでもなく觀海は徂徠門の高足太宰春台の門人で、春台から白石について聞くところがあつたらしいことは、「白石ノ采覽異言ハ殊ノ外ニヨク書レタルト、春台大方ナラマニ營ラレタリ、ト君修(觀海)ノ誌ナリ」(日本隨筆大成第一輯)といふ記事から想察されるのである。春台の名は出て来ないが、同書には、白石が「我ノツヨキ人」であつたこ

とを、画家養朴を困らせた事実をあげて親海が詠つた記事もあり（『鯛吐頁六』）、また君修とはことわつてゐないが、前後の文章から考へて同人の意見と判断されるものに、よく知られた地評

「日本ニテ国初已未經濟ヲ云人、熊沢、白石、徂徠、春谷四家ナリ。白石ハトカク江戸ヲ禁裏ノ如クスルツモリノヤウニ見ユ。武士ト云フコトミライナリ。武備ユルミタラバ乱起ルベシ。然バ唯正名ト云バナリテ經濟ハ次ナルベシ。」（『鯛吐頁六』）

がある。勿論、かういふ話や地評を親海が南畝に毛かつてしたかどうかは問題であるが、少くとも白石その人について、少くとも詩人としての白石については、何らか詠るところがあつたと考へても差支へないと思ふのである。

次に宮瀬龍門と耆山上人であるが、この二人は耆台と並ぶ徂徠門の逸材で詩名の高かつた服部南郭の門人である。南郭が白石を重んじたことについて、は別稿で既に明かにしたことであるが、前掲の文（『会雅記』）によれば、南郭は單に白石の詩だけで

はなくその文章もすぐれてゐるとし、さらにその人物を評しては「ミタリニナキ才也」といつてゐる（『隨筆大成一〇七才七卷』）。この南郭の門人である龍門、耆山の兩人は、松崎親海の場合のやうに南畝が師事したのではないが、詩の方面で諸校乃至は指導を受けたと考へられるから「狂瀾（清原）の風範（一四）以下」、かういふ關係から兩人を通じ南畝は詩人としての白石を知る機会をもつたのではないかと思ふのである。事実、製作年代は不明であるが——その文中「近刻日本詩史」の文字が見えるから多分明和八年かそれに近い頃のものであらう——、白石の詩「容奇」に和して作つた七言律二篇（紫氣、法乃）が南畝著言に收められてゐて、詩人白石への肉比が案外早かつたことを示す。しかしてその原因の一つとして、龍門、耆山との支りを考へることは、強ち無理ではなからう。

かやうに師友を通じて、白石についての認識は進みつつあつたと推測されるわけであるが、南畝自身が積極的に知らうとするに至つた状況を示す史料として、管見にふれたものに瀨田問答がある

。本書は、南畝の間に奥祐筆の瀬名貞雄が答へたもので、その奥書によれば、天明五年六月二十八日から寛政二年頃までのものである。たまたま瀬名が藩翰諸練修の事に関与してゐたため、問答がしばらく中絶したと記されてゐる。その問答の内容は、

一白石先生新井筑後守昇進被致候次第に候哉

答 初は高三百俵なり 新井勘解由と云御儒者なり 宝永六己丑年七月六日二百俵御加恩都合五百石地方に被成下 正徳三辛卯年十一月十一日朝鮮人末朝御用掛相勤候に付諸大夫被仰付 同年十一月十六日五百石御加恩都合千石を領す

(熱石十種第一頁) 刊本、三一頁

といふものである。瀬名貞雄が奥祐筆である上に、折よく藩翰諸の練修にも関係してゐたことから、右のやうに明快な返答ができたものと思はれる。この他、今までに見得た南畝の自筆本「白石爛」(和南塾書庫蔵、現)などによつても、この頃から寛政・享和にかけての時期に本格的な白石認

識がえられたものと考へられるのである。即ち、この白石爛は

卷之一 五考 聖像考 人名考 黄門白石問答

卷之二 衆討 俳優考

卷之三 法獄考 癸巳三月議一、二

卷之四 紺珠

卷之五 以訂菴奏議 日本国王の事 無題号朝鮮

江つかハさる鑑の事 無題号 將軍宣下三拾壹

ヶ衰の儀不同次第 准后三宮事 木瓜考

別巻 鬼神論

といふ構成をもつものであるが、その識語によれば各巻の書写の年次は次のごとくになつてゐる。

(1) 卷之一 (續一稿) 寛政戌午十月之望

(2) 卷之二 (識語欠)

(3) 卷之三 寛政八年丙辰七月晦

(4) 卷之四 享和壬戌七月

(5) 卷之五 以訂菴奏議 享和三年仲秋 同日

本国王之事 享和壬戌六月八日 以將軍宣下云々 寛政己未孟夏中浣

(6) 別巻 天明八年十月

これによつて見れば、天明八年の鬼神論の書字（6）が最も早く、寛政八年の決獄考・癸巳三月議（2）、同十年の黄白向書（1）、同十一年の將軍宣下云々（5のい）、享和二年の紺珠・日本国王の事（4）、（5のロ）、同三年の以町菴奏議（5のい）の順となる。（年次の示されてゐないものは、各巻の記載のある分にほぼ近い頃の書字と判断してよいのではなからうか。）

右の自筆本の他、私の探りえたものには、（7）琉球國の事略（天明八年？）・（8）白石書簡―大久保半五郎宛（寛政一〇年）・（9）白石手書五條字（正史関係のもの、文政三年）等があり（いづれも一話一言、所收）、白石に関係ある文書記録等の書字には、（10）正徳二壬辰十月九日御書付（寛政四・五年）・（11）同年金銀之事ニ付被仰出之趣（同上）・（12）近聞雅記抄（寛政五・六年）・（13）松平信綱川越野間龜の事（文化七・八年）・（14）小瀬徳庵宛書（文化九年）・（15）雨森東五郎書簡―白石宛（文化十一）等があり（以上は一話一言、所收）、さらにまた（16）南畝芳言（前出）・（17）諸先生法号（寛政

九・十年）（半日肉話所收）・（18）假名世説（文化七年刊）（後出）等がある。ほかに同様のなものには、続三十幅に收められた「鳩巢与白石書」（寛政十一年四月書字）があり、（10）（11）のやうに白石とのつながりがはつきりしてゐるものではないが、竹橋餘筆には長崎貿易新令関係の文書「正徳四年午五月西国中国大名衆へ被渡候御書付等」が收められてゐる（一國書刊行会本）。但し、これが白石の起草したものであることを、南畝が果して知つてゐたかどうかは不明である。なほ、私自身未だ確かめえないでゐるが、玉林晴朗氏によれば、寛政八年に白石著「高子親海記」を書写したやうであり（『蜀山人の賦』）、白石に関係ある記事所載の著作の書字といふことになれば、寛政六年（同上書ハ）の『近聞雅筆』（吉田篁墩著）・『五松館遺稿』―宝貨の説（三宅観瀾）がある。

以上によつて考へれば、南畝の白石認識は主として政治方面（内政・外交）であつたやうに見受けられるが、若い時代には詩人としての白石を知り、中年には政治家白石を知り、最晩年には歴史家

白石を認識したるものと判断される。最後の正史家白石を知ったといふことについて一言すると、それを示す前掲の内容は、最後の一篇を除き現在白石遺文に史論として収められてゐるもの——讀仁德帝紀・垂仁皇后之禍、景行拜彦狭島王為東山十五国都督・武内大臣紀寛、題采覽異言後の五篇で「白石全集」^(註)、晩年の大著史疑の面影を残すものと推測される問題作ばかりである。この(9)の識語は(八)の續

右白石先生手書土肥氏所藏正書字之

文政三年庚辰竹齋曰後七二翁書

雪庵。甲辰者、蓋享保九年甲辰也。其號仁

德帝紀而曰。人君壽賤。天下之不仁莫甚焉。

似說一時新政也。不知痴人夢中如何々々。

といふもの、末尾の語は南畝が白石の仁德天皇論を以て八代將軍吉宗の新政を諷刺甚非難したものと解してゐることが注意せられる。

然らば、南畝は白石をどう評価したのであらうか。この奥について私は今のところ未熟な見解しか持たさないが、南畝が白石を尊敬してゐたこと

は、上記の書写の事実が雄辯にそれを物語るほかに——それらにおいては白石先生の敬称を用ひてゐる——、半日閑語(八)前掲の(一)において、徂徠・春台、南郭、金谷、眞淵等の法号と共に白石の法号——慈清院淨寛をかかけ、自分の祖師徂徠や、また春台、南郭と同じにのたまふ感があるのが、それを示す。また前掲(9)の假名世説には、白石を夙惠補として

白石先生(一名は稷^(註)、字は君美、又在中、白石と号し、勤簡^(註)と稱す)七歳の時、芝居見にゆ

きて、はじめより終まで一々に記憶して歸り来たりとなり。此是あしくなる故、よくなる故、

なみ／＼ならずと、父のいはれたりとぞ。レ

と述べる(續筆大成卷二期頁一)、豪爽補としては、

青年時代、河村某(瑞賢)が白石の才智に目を

け、女(奥は孫娘)をめあはさんとしたのを、

彼等ごとき鄙夫の女をめとるべきにあらずとてし

堅く辞退したことを挙げてゐる(七回六頁、六)。假

名世説には、儒學者として藤原惺窩以下、林羅山

、山崎闇斎、伊藤仁斎、同東涯、荻生徂徠、服部

南郭、三宅石堂、松崎親海、細井玄沢、並河宗永等の人が取上げられており、なかんづく徂徠についての記事が多いのであるが、白石の特徴を夙^{（素）}、豪^{（豪）}、爽^{（爽）}、補^{（補）}の二つにおいて捉へたことは、南畝の白石観を窺^{（うかが）}う上の好材料となしえよう。前者の意思は、第一節に結んだ天明の評判記中の論「幼年より一ト選りの御方ではござりぬし」と照應するもので、臨時があるが、豪爽補の方も白石の特徴をよく捉へたものといへよう。但し、御方とも補としてゐる点は見逃せない。

さきにも述べた通り、南畝が読まえたと思はれる白石の著書は、その範囲が割合に狭かつたやうであるから、従つてその觀察も行届いてゐないのは当然であるが、それにしては、下僚に過ぎないとはいへ、御方から支配勘定へ昇進したことによつて、賤政面・外交貿易面・民政面の仕事にたづさはり得たことは、白石認識を深める契機となつたと思はれる。即ち、寛政十三（享和元年）に大阪の銅座勤務を命ぜられたことは、白石の参与した改貨幣業の回顧につながり得るものであるし（前

掲④・⑤の文書、参照）、文化元年の長崎出張（外交や貿易関係の執務もまた、白石の対外政策建議を知るための媒介となる体験であつたと見られるのである。さらに、文化五年になつて玉川巡視を命ぜられ、確かに民情にふれたことも、内政上における白石の貢献を知る上には絶好の経験であつたと思はれるのである。その範囲が限られてゐたにせよ、上記のごとき南畝の白石まなびは、東は南畝その人を考察する時、偶然とは思はれぬものがある。

畢竟では、南畝の本領は詩人にあつたと思ふ。これは南畝の生涯を見渡して、その出発が詩字を中心においた文学青年であつたことから想見されるが、実際に詩人としての天分に恵まれてゐたことは、その定評ある優れた詩歌文章が裏証するところであり、長崎出張の際知り合つた唐人張秋琴が、南畝を称讃して東都の詩宗なりとしたことなども、それを裏書するものであらう（蜀山人の「九一」）。この詩人としての天稟をそなへた奥で南畝は白石に似るが、詩風も唐詩ばかりで色彩を同じ

りする。だから、白石の詩は南畝の共感をよんだ筈で、既述の「容奇」の詩に喟和するといふやうなことも起りえたものと思はれる。白石も青年時代には俳句に凝り、芭蕉とせり合つたこともあるやうであるが、のち天下有用の学を志し重点を経史の方面に移したことであつた。南畝の場合も青年の日より大望を抱き、経世家的意識を以て意氣軒昂たるものがあつた松崎親海に師事したことであるから、華かな政治家的活動を思はなかつたとはいひきれまいが、所詮、一代坵の下端役人の地位では、それは先づ夢想に近いことで、従つてその驥足をのばすとなれば、詩文の方面においてするよりほかなかつたと考へられるのである。南畝の正史学が、結局は好事家的知識の集積に終つたのも、白石のやうに高所において時務にたづさはり得なかつたことによるものであらう。南畝の正史学について一言附加へると、晩年に考妣の孝といふ言葉を_usingしてゐることがある。それは文化六年の玉川巡視の際のことで、元日に「今年考妣の学のはじめなるべし」と日記に書きのけてゐる

のがそれである（『蜀山人の研究』）。この後『泉谷瓦碌集』以下諸記録文書の類を或は見、或は寫し、また光明寺の板碑の整理などもやつてゐる。右の語は二様に輯録され得るもの、その一つとしてこの頃から南畝の正史学的関心が一段深まつたと考へることができるが、もしこれをとれば非常に意味のある言葉となる。因みに、既述の白石の史論類書等は、この文化六年よりは十年後のことである。

最後に、白石と南畝との結びつきに關し、海外知識の獲得を挙げよう。白石の方は省略して、南畝を見ると、長崎出張によつて当時代人としては珍らしい程に多く、見聞し、また直接外国人にも會つてゐる。これは一時的ながら長崎奉行所へ勤務した以上当然のことではあるが、時恰かもロシヤ人が長崎に入港したため、ロシヤの使節レサノフ（南畝は「レサノット」としてゐる）と會見し、握手をするといふ機会を持ちえてゐる。前述の通り、唐人とは随分親しく交はつてをり、またオランダ人にも會つてゐるが、子息定吉宛の書

箇に唐人・蛮人（オランダ人）・ロシヤ人についての印象を比較しながら書き記してゐるのは、當時の人の觀察として興味がある。定吉宛の書簡（『文政十三日付』）において、同月十八日レザノフと握手したことを比較的詳しく記した後、「何々好奇者は、必奇事に逢ふ事と、生涯の大幸、大愉快之至にて、病氣も何も平癒いたし候。呵及」と書き加へたことは（『獨山人の研究』）、白石がシドナとの会見を以て「一生の奇会」といつたのを想起させるものである。白石に較べれば、南畝の海外認識は断片的のもので、史的意義において比較にならぬものではあるが、例へば、オランダについての知識を見ると、それは通事の今村金兵衛を通じて得たものらしく、オランダ商館内部のことを始め、オランダの地理・人情・書物等に及んでゐる（『同上書』）。オランダ関係の記事は、半日閑話・一話一言等に幾つか見えるが、この二書にはオランダ以外の海外事情に關する記事がかなり多数収められてゐる。なほ、南畝文庫藏書目録中には、『異国渡海船積路』『長崎異船一件』『魯西

亜一件』『魯西亜志』『沿海異聞』等があり、また『魯西亜人蘭書』一冊（如帝國圖書館所藏）および、『俄羅斯考』一冊・『羅又風説』一冊（共に靜嘉堂）が遺存することである（『同上書』）。

なにぶん幕府の高官と下僚とでは、同じ外国人に接するにも相違のあることであり、特にオランダ人との会見にしても白石の場合は回を重ねるごとと四度上つてもゐるから、その聴取したところにおいて量質ともに違ひが出て来たことはやむをえないとして、兩人に共通して認められるのは對外意識乃至は感情である。白石はオランダを以て武勇にすぐれたおそろしき國と見たが、しかし長崎新令にあらはれてゐる通り、オランダ人はもとよりシナ人の場合にも、その貿易や不法行為を承認せず、毅然たる態度を以て臨むべしとしたことは、既に知られたところである。これに対して南畝の場合も、國家意識が鮮明であつたやうで、前述のロシヤの使節レザノフに対し長崎奉行肥田豊後守が交易罷り成らぬと申し渡した時の情景

を子息に報じた手紙の中で、「何れ日本之光輝発越（ひびき）、希代之事を一覽いたし、感涙いたし候」(大内氏著書)と述べてゐる。またシナ人に対する場合にも、同様の意識を以てしたことは、例へば長崎に到着早々、病臥した際、たまたま末崎中の唐医胡兆新から診察を受けるやうすめられたにもかかはらず、「官吏之身として、異國之業可服事には有之まじく」とてこれを拒絶したごときことがある(「硯上書」)。かういふ事は、何も南敵に限ったことはなく、この時代の知識人には、特に朱子学的教養をもつ人にはロシヤ使節ラツクスマシ（ラツクスマシ）、大朝（大朝）（一八九二年）以後、海防問題が大なり小なり関心事となつてゐたから、國家觀念が一般化し強化されたつゝあつた筈であるが、現実には異邦人と接触し得たことから、それが実感として吐露されたわけであり、一言附記しておく価値があらう。

附稿——白石と馬琴

白石と馬琴との關係については、今後究明したいと思つてゐる所であるし、もはや紙面の限と

もないから、而巨匠の繋りにつき一言するにとどめたい。

現在はその所在を密かにしえないが、明治二十六年六月発行の史海算（しかい）二四号によれば、当時大内青丘氏の手許に馬琴校正の手沢本『新安手管』があつたといふことで、大内氏から田口鼎軒博士宛にその事を報ぜられると共に、白石の肖像をも贈呈せられたことが同誌考証欄に見え、その書簡ならびに書簡の内容が掲載されてゐる。しかして、その書簡において、右手沢本に馬琴の奥書として次のごときものがあることが紹介されてゐる

解（馬琴の後名）「云、余嘗白石先生ノ學術ヲ景仰ス、因テ其著書三四十種ヲ涉獵シテ以テ架蔵マ、乃者又是書ヲ友人小津生ニ借得タリ、倉平ノ間校訂シテ允借ノ報トス 卒業ノ夕、篇五ニ数行ヲ録シテ之ヲ還ス（篇左の數行は省略）白石の墓所・墓の文字・大さ等々記す」

大内氏は、同書簡中において、現在白石の墓は右にかきつけられた浅草の報恩寺にも、また高徳寺にもなく、東本願寺中の眞福寺にあることを述べ

られた後に、「文化以前に老樗軒及曲亭等の記録致候ものは現今の實際と齟齬致候事と相成候ものと存候」と記してをられるが、これに従ふ時は右の馬琴の與書は文化年間までのものと考へられ、従つて馬琴が白石の學術を景仰してその著書三四十種を涉獵したといふのは、青年期から四五十才までの間の事と推測し得る。この事實は、學者としての白石の存在の大きさを証明するばかりでなく、他方、馬琴のこの博搜ぶりは、さすが大作品里見八犬伝の著者たるにふさはしい所爲なることを思はしめるものである。

註

- (1) 『新井白石の研究』結論、七二九—七三一頁、及び『新井白石』一八〇—一八二頁。
- (2) 貞丈は白石の名栗君美をキンヨシとするが續説、キンミの訓もある拙稿「新井白石の名栗と照」、名栗日東証史一〇三三號参照。
- (3) 「阿蘭陀人の咄にハルシヤの馬良馬のよし」の項中の白石の書は、本書か東雅かであらう。
- (4) ほかに單書考の名は挙げないが、白石の説として引いたものに「鳥の羽の事」といふ項がある。

- (5) なほ、どの著書からとつたか判定し難いものに龍鬚、鹿恒の二項がある（第一、四四頁）。
- (6) 拙稿「林家と水戸と白石——太伯國祖論をめぐる三史学の立場——」日本証史第一五八號参照。
- (7) 新井白石の研究、第三編第一章および第四編第三、第四章、参照。
- (8) 同右——七四七頁の二三〇、七四八頁の二五二、参看。

- (9) 白石認識の通路として近藤正育も考へられる。
- (10) 「白石史學と國學」——証史北史學會。
- (11) 表紙には「白石爛」三とあり、扉には「及びや卷之八 鬼神論」四卷と記されてゐる。
- (12) 新井白石の研究——七五七頁第三編七卷、参照。
- (13) 半日閑話には、○和蘭人來、○カピタン船、○寛政六年阿蘭陀人献上物、等の記事が見え、一話一言には、○オランウ、タン（註、オランダ）（註、献上のもの）、○長崎御書抄（註、この中にオリ）（註、等）

- (14) 栗田元次氏著『新井白石の文治政治』本編第四の四、貿易の統制と國産の開發、参照。